

『ドイツ・イデオロギー』は「マルクス口述・エンゲルス筆記」の産物か？

—大村 泉説の吟味—

黒 滝 正 昭

キーワード

マルクス／エンゲルス 「ドイツ・イデオロギー」草稿 「持ち分問題」
新MEGA I/5 リャザーノフ, D. マイヤー, G.

大村 泉氏は、編著『唯物史観と新MEGA版「ドイツ・イデオロギー」』（社会評論社 2018年10月。以下「編著」と略記）「第5章 唯物史観の第1発見者」において、氏の斬新な“『ドイツ・イデオロギー』＝「マルクス口述・エンゲルス筆記の産物」”説が生じた経過を次のように述べている。「H^{5a}のM25の基底稿〔『ドイツ・イデオロギー』第1章の自筆草稿、マルクスのページ付けでS.1-29の部分がH^{5a}、そのうちS.25がM25。その頁の修訂正前の最初に書かれた本文〕の筆跡がエンゲルス→マルクス→エンゲルスとなっていることを、唯物史観の第1発見者に関する論争で最初に指摘し、廣松〔渉〕説〔「エンゲルスが真の著者」説〕に疑問を投じたのは渋谷 正であった。渋谷によれば、1995年にIISG〔アムステルダムの社会史国際研究所〕で草稿当該箇所を目の当たりにして、エンゲルスの傍らに立つマルクスの姿が脳裏に浮かんだという¹⁾。本章は渋谷のこの直感を、草稿同章の即時異文〔執筆中途にその場で訂正・書き改められた文章〕はなぜ多いのか、という筆者独自の問題関心から発展させたものである。〕と述べている（p.107. []内は引用者。以下同様）。

この編著の中で氏は、自説を資料に即して詳論しているが、さらにその趣旨をコンパクトに図式化した報告〔『ドイツ・イデオロギー』オンライン版の作業仮説：マルクス口述/エンゲルス筆記』（報告レジメ全5ページ。以下「レジメ」と略記）を、2019年8月23日仙台で開催された国際シンポジウム²⁾において行った。

私は、氏の問題提起・仮説には随分考えさせられてきたが、同時に氏の結論には根本的疑問を抱き続けてきた。もしマルクスが、途中の訂正も含め一字一句自分の口述どおりに筆記させるというのであれば、それを専らエンゲルスに筆記させねばならない理由はどこにあるのだろうか？ エンゲルスとの議論を終えさえすれば、『ドイツ・イデオロギー』第3章の清書を一部担当したヴァイデマイヤー（Weydemeyer, Joseph）あるいはマルクス夫人・イェンニー（Jenny Marx）等に筆記さ

せても一向に構わなかったであろう。マルクス、エンゲルス手書き草稿の状況に関わる氏の詳細な分析は、事実関係としては恐らく正確なものと思われるが、それによって氏の仮説が証明されたとはいえないところに問題がある。以下、私見を展開して行こう。

I

大村氏が仔細に分析したのは、『ドイツ・イデオロギー』第1章「フォイエルバッハ」草稿のマルクスのページ付けで40-72ページの部分（新MEGAによる呼び名でH^{5c}）³⁾である。この部分の基底稿と即時異文はすべてエンゲルスの筆跡で、マルクスの筆跡は「後刻異文」（基底稿を後に推敲する過程で生まれたテキストの削除や置換、挿入および位置転換等による文章修正）のみである。筆跡だけからこの部分の著者を判断すればマルクスではなくエンゲルスだということになるだろうが、実際は逆で、エンゲルスではなくマルクスが著者だというのが氏の仮説である。それに関する氏の論理の組み立ては簡潔・明快である。

第一、草稿H^{5c}の即時異文の出現頻度が、新MEGAフォーマットに換算して1ページ当たり平均17.3回と異常に多い（この時期のエンゲルスの他の手書き草稿の場合のその約7倍）。もしエンゲルスがH^{5c}の著者であったとした場合、これは有り得ない頻度である（エンゲルスは頭の中で文章を反芻してから書くタイプなので、元々即時異文は少ない）。これに対してマルクスは、書きながら考え、書いては消し、消しては書くタイプなので、元々即時異文の数や種類が多い。この両者の「書き癖」の相違がここでは決定的に重要で、マルクスが、エンゲルスに口述筆記させたと考えないと説明がつかない。口述筆記の場合、書き癖は口述者（マルクス）の方に似るのであって、物理的筆記者（エンゲルス）には似ないからである（レジメ、p. 3）。そして同草稿の執筆時にマルクスとエンゲルスは、日常的に一緒にいて互いに深更まで議論していたことが確認されている⁴⁾。

以上が大村説の原点であり、根本視点である。氏が専ら注目しているのはマルクスとエンゲルスの「書き癖」であって、「しゃべり癖」ではない。しかし「書き癖」が現れるのは、二人がそれぞれ独立に論文を書くときではないのか？ 「口述筆記」ということになると、問題になるのは「しゃべり癖」の方であって「書き癖」ではなからう。二人が一緒にいて互いに議論しながら共同で文章化する場面に「書き癖」を持ち込むのは、正当かどうか？ そもそも「書き癖」と「しゃべり癖」とは、一致するものであろうか？ マルクスが発言したり、講演したりするさい、しゃべりながら考え込み、発言しては訂正し、幾度も中断したりしたかどうか？ そういった問題を十分検討せずに、専ら事柄を「書き癖」に還元するのは、一面的に過ぎるのではないか？

第二、次いで氏は、即時異文の様々な種類の具体例に立ち入る。それらは大別して(1) 同音異義語の書き損じ、(2) 定冠詞・不定冠詞の削除と置換、(3) 直ちに復活する修訂正、等である。

(1) 同音異義語の書き損じ

ドイツ語を母語とする著者が同音異義語を書き間違えることは稀だが、聞き間違えることはありうる、として、口述筆記が行われたことの傍証とする。具体例として das (冠詞、関係代名詞) と daß (接続詞) の混同が、草稿 H^{3c} に 3 例あるという。まず M42 (マルクスのページ付けで 42 ページ) にある文章: Die Trennung von Stadt & Land kann auch gefaßt werden als die Trennung von Kapital & Grundeigenthum, als der Anfang ~~de~~ einer vom Grundeigenthum unabhängigen Existenz & Entwicklung des Kapitals, ~~na~~ eines Eigenthums ~~dessen~~ daß das bloß in der Arbeit & im Austausch seine Basis hat⁵⁾。この下線を施した部分が、daß と das の混同とされる最初の例である。しかしこの場合は、元々 dessen に続く文章になっているので、指示代名詞 dessen によって代理される 2 格の補足語としての daß 節が、一定の区切りまで最初口頭で述べられたのであろう。それを記述途中で関係文に直した訳で、聞き間違いによる das との混同の例としては不適格と言わざるを得ない。

次に M64 の例: Hieraus erklärt sich auch das Faktum daß das man | : in der Zeit: | nach der Völkerwanderung überall bemerkt haben will, daß nämlich der Knecht der Herr war, & die Eroberer von den ~~romanisirten~~ Eroberten Sprache, Bildung & Sitten sehr bald annahmen⁶⁾。下線部分が、daß と das の混同とされる。しかしそれは、das 以下の関係文が出来上がったことを前提にすればそうも言えるという結果論であって、当初は直接、関係文なしに 2 行目の daß nämlich der Knecht der Herr war… に続く文章として読み上げて (マルクスが読み上げたとは限らない。エンゲルスが自分で二人の議論をまとめながら、読み上げつつ筆記し、それを聞きながらマルクスが再考して、さらに意見を述べたのかも知れない)、それを書いていた途中で、いや関係文をつけて説明を加えたほうが良いのではないかと議論が出て、それが良さそうだと判断して書き換えたという可能性もある。

最後に M71 の例: Das jus utendi et abutendi selbst spricht einerseits die Thatsache aus, das daß das Privateigenthum vom Gemeinwesen durchaus unabhängig geworden ist, & andererseits die Illusion, als ob das Privateigenthum selbst auf dem bloßen, ~~unumschr~~ Privatwillen | : der willkürlichen Disposition über die Sache: | beruhe⁷⁾。この場合の das と daß は、口語体で daß を飛ばして das Privateigenthum… と書こうとして、思い直して daß に書き換えたような印象を受ける。

以上 3 例いずれも、同音異義語の「聞き違いによる」誤り (レジメ p.4) と断定するのは、一面的と思われる。

それでは、「führ [te] (動詞) と für (前置詞) の混同→ドイツ人なら起こりえない混同」 (レジメ p.4: 編著 p.113.) と氏が強調する次の例はどうだろうか? M48: Im Anfange bedingte die geringe cirkulirende Quantität des Goldes & Silbers ~~die~~ das Verbot der Ausfuhr dieser Metalle; & die | :durch die: | Nothwendigkeit der Beschäftigung führ für die wachsende städtische ~~Bet~~Bevölkerung | :nöthig gewordene: | meist vom Auslande importirte Industrie konnte der Privilegien | :nicht entbehren: |, die natürlich nicht | :nur: | gegen inländische,

sondern ~~nur~~ hauptsächlich gegen auswärtige Konkurrenz gegeben werden konnten⁸⁾。上記下線部が「混同」とされるが、この点に関しては大村氏は、明快とは言い難い次のような説明を付け加えている。

「おそらくマルクスが、die Nothwendigkeit der Beschäftigung für と述べた際、やや間をおいたため、エンゲルスは die Nothwendigkeit der Beschäftigung führ [te] と書いたが、die wachsende städtische…Bevölkerung と続いたので führ を削除し für に置換したのであろう」(編著 p.113. ここでの [] は大村氏)。これによると、マルクスが読み上げた際に für で切って間を置いたためエンゲルスは、マルクスが führte と言おうとして途中で切ったものと判断して führ まで書きかけたその時に、マルクスが für die…Bevölkerung と読み上げを再開したので、エンゲルスは自己判断の誤りを悟って慌てて führ を消し、für と書き直したということになるだろう。これは非常に不自然な想定であろう。マルクスがドイツ語の一つの単語の途中で読み上げを切ったなどと、どうしてエンゲルスは判断したのか？ ドイツ語にもイントネーションというものがあるから、発音が同じであってもイントネーションで相手に違いが伝わりし、そもそもマルクスが読み上げていたのだとして、führ- で読み上げを切るなどということとはありえないであろう。マルクスが読み上げたにしろエンゲルスが読み上げたにしろ、口頭で述べるまとめ案は常に筆記より早く、数段先に進んでひとつの意味上の区切りまでは行くはずである(例えばこの場合、die Nothwendigkeit der Beschäftigung führte meist vom Auslande importirte Industrie den Privilegien まで行くなど)。訂正は、それを確認しつつ読み上げ・筆記している間にまた別の考えが生じて、議論が起り、合意に達して生まれるものであろう。

(2) 定冠詞・不定冠詞の削除と置換

H^{9c}には定冠詞・不定冠詞の削除と置換の事例が60箇所を超え、エンゲルスの単独稿と比べ、10倍以上の出現頻度だという(編著 p.99)。この場合には、エンゲルスによる「聞き誤り」は問題にならない。「エンゲルスが[定]冠詞や不定冠詞と名詞をワンセットにして書き下ろし、後から変更しない書き癖があった」のに対し、「書きながら考える、訂正しては書く、という…書き癖」を持つ口述者マルクスが、「①[定]冠詞や不定冠詞のところで口述を止め、続けて書く内容を変更した場合、つまり②元々はワンセットで口述していたが、名詞に変更を加えた場合、このような結果が生まれるのは当然である」(編著 pp.99-101)。

氏は、上記引用部分の①と②を無造作に「つまり」で結んでいるが、①と②では意味が全く異なる。定冠詞や不定冠詞のところで口述を止めるならば、マルクスはワンセットでは口述していないということである。逆にマルクスが、元々はワンセットで口述していたとすれば、一体どういう名詞を元々彼は述べたのか？ さらに彼は、その名詞を超えて意味上の一区切りが付く節全体まで述べてワンセットにしたのではないのか？ マルクスとエンゲルスが議論しながら共同で文章を創っていく現在進行形の過程の解明は、こういう分析を必要とするものであろう。「マルクスの書き癖が反映した事例」をここにも見て、「草稿当該箇所が

マルクス口述・エンゲルス筆記であることの証左」と結論付ける（編著 p.101）氏の組み立てには飛躍があり、詰めが甘いように思われる。

大村氏が掲げる 20 の事例のいくつかを検討しよう。まず冒頭 M42 の例：Hier tritt s also der Unterschied zwischen den naturwüchsigen & den durch die Civilisation geschaffenen Produktionsinstrumenten hervor. Der *Acker* | : (das Wasser etc) : | kann als naturwüchsiges Produktionsinstrument betrachtet werden. Im ersten Fall, beim naturwüchsigen Produktionsinstrument, werden die Individuen unter die Natur subsumirt, im zweiten Falle unter die ein Produkt der Arbeit. (下線部が氏の指摘する箇所。氏は最後の im zweiten Falle 以下しか掲げていないが、私は、ここでの文脈を理解するために必要な最小限の文章全体を引用した。斜体はエンゲルス又はマルクスによる下線部。| :: | はマルクスによる挿入部分⁹⁾。

ここでの die の抹消は、前の句の unter die Natur との対で、unter die Arbeit とマルクスまたはエンゲルスが初めに述べて、それを書こうとしたことから生じただろうということは容易に想像が付く¹⁰⁾。マルクスが口述を die で止めた、という想定は、非常に不自然である。

次の M41 の例：Die Stadt ist bereits die Thatsache der Konzentration der ~~Produ~~ Bevölkerung, der Produktionsinstrumente, der des Kapitals, der Genüsse, der Bedürfnisse, während das Land gerade die entgegengesetzte Thatsache, die Isolirung & Vereinzlung, zur Anschauung bringt. (新 MEGA, a.a.O., S.71, S.914.; 渋谷同上書 p.110. 下線部が大村氏が指摘する当該箇所。編著 p.100.)

ここは当初 des Kapitals なしに、der Genüsse に続けて述べたように思われるが、M41 に入ってからマルクス、エンゲルスは、専ら Produktionsinstrumente として議論してきたところなので、ここで das Kapital を突然、何故書き込む必要があるのか考えさせられる文章である。M42 に出てくる「都市と農村との分離は、資本と土地所有との分離として、資本—すなわち、労働と交換のうちだけにその基礎をもつ所有—の、土地所有から独立した存在と発展のはじまりとしてもとらえられうる。」(渋谷① pp.116-118) という議論が既に頭の中にある。それと繋げようとしたのだろうか？ 当面の拙論とは関係ないが、興味深い問題である。

以上、ここで氏が掲げる残り 18 例をさらに一つ一つ検討することは、当面の論旨を離れて『ドイツ・イデオロギー』の内容に深入りすることになりそうなので、この辺で切り上げて、次項に進むことにしたい。

(3) 直ちに復活する削除訂正

H^{5c} には、削除された即時異文の構成要素が少し先の本文テキストで復活する事例が、総計 60 箇所程度あるという。そのうち 20 例を氏は掲げている。そして今まで同様エンゲルスの単独稿と比較して、類例数に 20 倍近い差があり、この極端な差が生じた理由もまた「H^{5c} の基底稿がマルクス口述・エンゲルス筆記であったからだと考えるのがもっとも合理的であろう」と述べている（編著 p.103）。ただここでは新たにもう一つ、エンゲルスの「筆記ミス」も含まれているという。「口述筆記は常に同一の速度、同一の音声でなされるものでは

なく、早口や小声になれば、聞き漏らしが生まれ、再確認して訂正せざるを得ないことが多々ある。[だがもしそういう場合が生じたら、筆記する前に直ちに聞き直すのが普通であろう。わざわざ不確かなことを筆記して、その上で訂正するというのは非常に不自然である]。ここに紹介した事例の全てではないにせよ、一定部分はエンゲルスの聞き漏らし、ないしは聞き違いに由来すると考えて良いであろう」(編著 pp.103-104. 下線は引用者)。しかし紹介された 20 事例のうち、どのケースが下線部に該当するのか? 何故そう考えられるのか? 氏は一切言及していないので、検証のしようがない。従ってわれわれは、またいくつか氏の掲げている事例を自分で吟味するほかない。

まず冒頭 M40 の例: Im ersten Falle findet existirt¹¹⁾ die kleine Industrie, aber subsumirt unter die Benutzung des naturwüchsigen Produktionsinstruments, im zweiten Falle & daher ohne Th Vertheilung der Arbeit an verschiedene Individuen; im zweiten Falle besteht die Industrie nur in & durch die Theilung der Arbeit. (新 MEGA, a.a.O., S.70, S.914.; 渋谷① p.114; 渋谷② p.109. 下線部 2 箇所に関連が大村氏指摘の当該箇所。編著 p.102.) この場合には、エンゲルスの聞き漏らし等は関係なさそうである。Im ersten Falle で述べた土地・自然に支配された小経営との対比で、im zweiten Falle として工業が専ら分業のみによって成り立つ状態を挙げた。それを記述中に、前者の場合分業はどうなるのか補足した方が良いということになったように思われる。

次に氏が「聞き漏らし」等の例として挙げたのかもしれないと思われる M52 の事例: Es versteht sich daß die große Industrie nicht in allen Ländern & nicht in jedem in jeder Lokalitäten Lokalität eines Landes zu derselben Spät Höhe der Ausbildung kommt, aber kommt. (新 MEGA, a.a.O., S.89; S.924; 渋谷① p.138, ② p.134. 旧 MEGA, a.a.O., S.50, S.581) 大村氏はただ “in jeder Lokalitäten Lokalität eines Landes” のみ掲げている (編著 p.102) ので、単純な語尾の「聞き漏らし」の印象を与えるが、調べてみるとこの箇所では、上記のように大変複雑な修訂正が行われていたことが分かる。

渋谷氏によると「in allen Ländern & nicht が 1 本の横線で抹消されており、また、allen の上の行間に jedem が書き込まれ、これも抹消されている。行間に jedem が書き込まれているが、Ländern が単数形 3 格の Lande に改められている形跡はない。したがって、最初に in allen と書きかけて、allen を抹消するつもりで jedem を書いたが、jedem を抹消して allen をふたたび生かし、そのあとに Ländern & nicht を書いたのであろう。」「『地方 (Lokalität)』の直後に、太い抹消線がひかれて何かが抹消されている。アドラツキー版は、Lokalität<en> (<諸> 地方) と判読する。」(渋谷② p.134) MEGA には写真版の収録はないが、「聞き漏らし」といった問題ではなからう。

もう一つ大村氏が “als Bedingung Bedingungen der Selbstbethätigung” とのみ挙げている M61 の事例 (編著 p.102) はどうだろうか? Diese verschiedenen Bedingungen, die zuerst als Bedingung Bedingungen der Selbstbethätigung, später als Fesseln derselben erschienen, bilden in der ganzen geschichtlichen Entwicklung eine zusammenhängende Reihe von Verkehrsformen,

deren Zusammenhang darin besteht, daß an die Stelle der früheren, zur Fessel gewordenen Verkehrsform, eine neue, den | : entwickelteren: | Produktivkräften ~~entsprechende & damit der aus~~ & damit der fortgeschrittenen Art der Selbstbethätigung der Individuen entsprechende gesetzt wird, die à son tour wieder zur Fessel & so dann durch eine andre ersetzt wird. (a.a.O., S.103, S.933; 渋谷① p.156, ② p.155. 下線部が当該箇所)。なお上記は MEGA に拠ったが、渋谷②によると Produktivkräften ~~entsprechende & damit der aus~~ fortgeschrittenen Art…とされていて、この部分が MEGA と異なる。ここも写真版が収録されていないので確認できない。

ここは「聞き漏らし」というより、初め *Bedingung* と単数にしたが、文章全体が複数で流れているので *Bedingungen* と複数にした方がよさそうだという判断に拠ったように思われる。

最後に、氏が最多分量で掲げている M42 の事例を検討しよう：Die Konkurrenz der fortwährend in die Stadt kommenden entlaufenen Leibeigenen, ~~die Nothwendigkeit~~ der fortwährende Krieg des Landes gegen die Städte & damit die Nothwendigkeit einer organisirten städtischen Kriegsmacht, das Band des gemeinsamen Eigenthums an einer bestimmten Arbeit { | : | : , die Nothwendigkeit gemeinsamer Gebäude zum Verkauf ihrer Waaren & ~~de~~ zu einer Zeit, wo die Handwerker zugl. commerçants & die damit gegebene Ausschließung Unberufener von diesen Gebäuden : | , der Gegensatz der Interessen der einzelnen Handwerke unter sich, die Nothwendigkeit eines Schutzes der mit *Zeit* Mühe erlernten Arbeit ~~gegen~~ : | } und die feudale Organisation des ganzen Landes ~~fürhten~~ waren die Ursachen der Vereinigung der Arbeiter eines jeden Handwerks in Zünften. (a.a.O., S.72f., S.915; 渋谷① pp.118-119, ② pp.111-112. 恐ろしく長い文章で、大村氏も 1/3 程で引用を打ち切って、以下…としている (編著 p.102)。下線部 2 箇所が該当箇所。)

この事例の *die Nothwendigkeit* の抹消は、渋谷氏によれば「最初に *die Nothwendigkeit* (必要性) と書いたが、*Nothwendigkeit* を抹消して、そのあとに『農村の諸都市にたいするたえざる戦争 (fortwährende Krieg des Landes gegen die Städte)』と書いた。この修正にともなうて、*die Nothwendigkeit* の前に書かれた定冠詞の *die* の *ie* の上に *er* を書き重ねて、*die* を *der* に変えた」ということである (渋谷② p.111)。したがってこれは、「聞き漏らし」等の問題ではなく、マルクスまたはエンゲルスが、都市手工業者たちのツunftへの団結の要因の一つとして都市の組織された戦力の必要性を挙げようとして、その前にそもそも何故都市に戦力が必要になったのか、その原因を簡潔に述べる必要があると判断したためと思われる。これも記述の進行中に生じた両者の議論の結果と言ってよいのではないだろうか？

加えてこの事例では、MEGA の表記で | : : | で示した挿入箇所の中にさらにもう一つの挿入箇所が含まれる二重構造になっている (S.915. 上記引用文中、私が { } で囲った部分)。これは原草稿では、左欄に書かれた本文中、*an einer bestimmten Arbeit* の直後に F という記号が付され、右欄のほぼ対応する位置に同じく F という記号が付され、それに続いて上記 { } で囲った部分が補足テキストとして書かれている。その補足テキストの中でさらにそ

れを補足するテキスト | ; die Nothwendigkeit gemeinsamer Gebäude zum Verkauf ihrer Waaren & de zu einer Zeit, wo die Handwerker zugl. commerçants & die damit gegebene Ausschließung Unberufener von diesen Gebäuden : | がより小さな字体でびっしり書き込まれている（渋谷① pp.118-119; 渋谷② p.112. MEGA に M42 の写真版の収録がないので、直接の確認はできない。）。そしてこの補足テキスト全体の中で、die Nothwendigkeit がなお2回も登場するのである。都市の手工業者たちがツunftに団結した諸原因を明らかにすることは、マルクスとエンゲルスにとって非常に重要な問題であったことが読み取れる。大村氏がここで指摘した「直ちに復活する削除訂正」としての die Nothwendigkeit の例は、それを導き出す一つのきっかけに過ぎなかったのではなかろうか。

II

以上、大村氏が事例として掲げている (1)、(2)、(3) の即時異文の主要なものを検討してきた。遺憾ながら私は、これこそ氏の仮説を証明するものだという例を、一つも見出すことができなかった。ところが氏自身は、(1)、(2)、(3) の即時異文の具体例を見た後、「検証結果」としてそれまでの議論をまとめ、自己の仮説が証明されたと主張している。

恐らく一つには氏の掲げる事例が、「即時異文」の当該箇所を物理的に含む前後数語に限定されていて、一つの文章全体ですらないことが、影響しているように思われる。氏の意図が、自分で見出した事例をできる限り多く提示するために、個々の事例の長さを最大限切り詰めることにあるのは良く分かる。しかしそれによって、その「即時異文」が文章中あるいは文脈上に占める意味が捉えられなくなってくるのが問題なのである。社会思想は物理現象ではないので、訂正・修正の箇所のみ見せられても、その訂正・修正が何故行われたか（本当に氏の言うように同音異義語の書き損じ等々が理由なのかどうか？）は分からない。そのため私は、各事例を必要最小限拡大して分析せねばならなかった。逆に大村氏は、そこに立ち入らないで同音異義語への訂正・修正等の事実と回数多さを専らマルクス、エンゲルスの「書き癖」と関連させることによってのみ、「マルクス口述/エンゲルス筆記」説が証明されると考えているようである。

「口述筆記については『証拠がない』（新 MEGA 先行版¹²⁾、S.168）、というのが新 MEGA 編集者の立場である。」「新 MEGA 編集者は、『ドイツ・イデオロギー』第1章「フォイエルバッハ」の草稿が口述筆記である『証拠はない』と述べた。しかし彼らは草稿の即時異文の多寡に全く関心を示していない」（編著 pp.116-117）、と大村氏は言うが、私自身は、関心を持って分析した結果として、氏の仮説は即時異文の事例によっては証明されていない、ことを見出したのである。

他方、渋谷 正氏は、「[[マルクス、エンゲルスの] 共同労作 [[ドイツ・イデオロギー]]』にたいする『持ち分』の問題を提起したグスタフ・マイヤー [1920] も、『口述筆記説』を初めて唱えたリャザーノフも、草稿の記載状態からこれらの仮説を立証したわけではない。しかし、もっぱら草稿の記載状態の考察にもとづいて、『口述筆記説』を立証する大村泉の研究が現れた。リャザーノフが『口述筆記説』を唱えたのは1926年であり、その後90年余りを経て、この問題について

も、たんなる『仮説』に留まらない文献学的な決着が迫られているといえよう」と、拙論とは正反対の評価を下している（編著 p.165. 下線は黒滝）。

そこで本章では、これまでの主要な研究史に立ち入って、『ドイツ・イデオロギー』におけるマルクスとエンゲルスの「持ち分」問題を検討することにしよう。

まず大村氏が「口述筆記については『証拠がない』（新 MEGA 先行版、S.168）、というのが新 MEGA 編集者の立場である」とあっさり片付けている新 MEGA 編集者は、ただそう断定しているだけなのだろうか？

「この評論 [H^{5a}：マルクスのページ付けで S.1-29. の部分。編集者による表題 *Feuerbach und Geschichte* の冒頭節。ただしこの表題は、新 MEGA, I/5 では採用されていない。] の著者は誰か？ 伝承された草稿の著者を、エンゲルスの筆跡かマルクスの筆跡かで決めること、すなわち一方ではエンゲルスを主要な著者と規定すること、あるいは他方で彼に単なる記述者の役割しかあてがわれないこと、これはどちらも許されない。口述の論説というものが草稿の執筆に何らかの意味を持ったのかどうか、それを証明するものは未だに伝承されていない。」¹³⁾。「この評論の構成と着想は、マルクス固有の諸特性を帯びている。それ故まず最初、マルクスの一草稿 (ein Entwurf) があったのであろう。他方、その草稿 (der Entwurf) を印刷用草稿 (die Druckvorlage) と比較すると、エンゲルスの持ち分に関する手掛かりが伝わってくる。右欄にエンゲルス筆跡のテキスト諸節 (Textpassagen) があり、それらは草稿の性格 (Entwurfcharakter) を持っている。これらは初稿 (Urfassungen) であると、確実に前提してよかろう。草稿 [左欄のテキスト] と印刷用草稿 [右欄のテキスト] との間に部分的にかなりの諸相違があることも、同様にエンゲルスによる自立した推敲を証明している。何故なら、マルクスによる中間草稿といったもの (ein Zwischenentwurf) はありそうもないからである。エンゲルスが直接、一詳論 (eine Darlegung) を印刷用清書原稿にする (druckfertig zu Papier zu bringen) 能力を持っていることは、疑いない。それ故、マルクスとエンゲルスが同等の権利を持った著者であるということは、科学的にも編集上も (wissenschaftlich-editorisch) 完全に基礎付けられている。」(ebd., S.168) これは、Louise Freyberger がエンゲルスの指示と口述筆記に基づいて記したリストの中の „3) Feuerbach & Bauer, 1846/47 M. & ich“ という記述にも合致する (ebenda)。

以上から新 MEGA 編集者たちは、H^{5a} の構成と着想がマルクス独特のものであると認定し、エンゲルスが筆記している左欄のテキストは、恐らくその前にマルクスの最初の草稿があり、それに基づいてエンゲルスが筆記したものと推定する。これに対して右欄のエンゲルス筆跡のテキストは、エンゲルスの自立した推敲による「この評論」(diese Rezension) の初稿とみなしうるものだというのである。

編集者たちの判断の根本基準となっているものは、『ドイツ・イデオロギー』執筆時点でのマルクスとエンゲルスそれぞれの理論構想・着想の独自性の認識にあることは明らかだと思われる。それを資料的に確認できる事実関係とつないで総合的に判断していく訳である。

この点は、リャザーノフ (1926) も同じである。「草稿はほとんど全くエンゲルスの筆跡で書かれている；マルクスの筆跡によるものは、ただ諸修正・挿入と若干の欄外注だけである。しかしな

がらそこから、著者をエンゲルスと看做すべきだという結論は全く出てこない。むしろ逆である。とりわけ第1章（「イデオロギー一般、とくにドイツの〔イデオロギー〕」〔新MEGAの表記ではM^{5a}+M^{5b}に当たる〕）に関しては、次のような印象を受けている。即ちたといそれが二人の友人同志の共同労作だとしても、それでもマルクスがその労作をエンゲルスに口述筆記させた、という印象である。これに反して第2章〔同じくM^{5c}に当たる。上述大村氏が、事例を掲げて専ら分析した章〕は、エンゲルスが単独で、口述によらないで書き記したように見える。第1章では、エンゲルスが自分自身の諸草稿で通常行っているよりもはるかに**より多くの**・かつ**より根本的な**諸修正が**エンゲルスの筆跡**で行われており、そしてここ第2章から先で実際に見出されるよりも、はるかに**より多くの**・かつ**より根本的な**諸修正がエンゲルスの筆跡で行われているのである。しかしながら我々は、この労作に対する二人の著者の持ち分という厄介な問題を、『ドイツ・イデオロギー』の筆跡を根拠にせず決定したいと思う。ここで我々の関心を引くのは寧ろ、著者たち自身によって行われた草稿の整理と編集に関する問題である¹⁴⁾。

長くなるが、非常に重要な中身が述べられているので、原文も引用する：Das Manuskript ist fast ganz von Engels' Hand geschrieben; von Marxens Hand rühren nur Korrekturen, Einschaltungen und einige Randbemerkungen her. Daraus folgt aber durchaus nicht, daß als Autor Engels zu gelten hat. Eher umgekehrt. Besonders beim ersten Kapitel („Die Ideologie überhaupt, namentlich die deutsche“) hat man den Eindruck, daß, wenn es auch eine gemeinsame Arbeit der beiden Freunde ist, Marx es doch war, der sie Engels in die Feder diktierte. Dagegen scheint Engels das zweite Kapitel allein, nicht nach Diktat, niedergeschrieben zu haben. Im ersten Kapitel sind viel mehr und wesentlichere Korrekturen von Engels' Hand, als Engels in seinen eigenen Entwürfen für gewöhnlich zu machen pflegte und als sich hier vom zweiten Kapitel an tatsächlich finden. Doch wollen wir die verzwickte Frage nach dem Anteil der beiden Autoren an der Arbeit nicht auf Grund der Handschrift der „Deutschen Ideologie“ zu entscheiden suchen. Uns interessiert hier vielmehr die Frage über die von den Verfassern selbst vorgenommene Ordnung und Redaktion des Manuskriptes.¹⁴⁾ (隔字体は原文)。

上記引用文中の下線部を見ると、リャザーノフは、本稿Iで詳論した大村氏の論点と基本的に同じ点に既に着目していたことが分かる。ところが大村氏はこの点を看過したようである。[G. マイヤーの]「共同執筆説に対しては、D. リャザーノフ・・・の異論があった。彼は、・・・草稿H^{5a}及びH^{5b}（当時M1, 2は未発見）とH^{5c}とを截然と区別し、前者はマルクス口述・エンゲルス筆記、後者はエンゲルスの単独執筆とした。理由は前者についてだけ述べ、エンゲルスの修正箇所が当時のエンゲルスには不似合いだ、というものであった（ibid. S.217）」（編著 p.79）。「不似合いだ」といった漠然とした主観的理由ではなく、**修正箇所の量**をリャザーノフが基準にしている（「前者」に関しても**「後者」に関しても!**）ことは明瞭である。[大村氏はこのリャザーノフの論旨を看過して、H^{5c}「基底稿¹⁶⁾」の「筆跡=書体がエンゲルスのものであることを唯一の根拠に、この部分がエンゲルスの単独執筆であると想定したリャザーノフの仮説」と述べている（編著 p.104. 下線は黒滝）が、完全な誤読である。]「マルクス口述」に関しては、エンゲルス単独ではなし得ない「より根本的な諸修正」という理論的中身に関するリャザーノフの判断があることが読み取れる。その上

でなおりヤザーノフは断定はせず、「印象を受けている」という推定に止めているのである（したがって、事実関係として口述筆記をさせたと認定している訳ではなく、口述筆記でもさせないとエンゲルスがこういう文章を書くことはできないのではないか？という問題提起であろう。上述新MEGA編集者たち（2003）は、これに対して、口述筆記ではなくマルクスの最初の草稿の存在を推定して、応えたのである）。そして「二人の著者の持ち分という厄介な問題を・・・筆跡を根拠にせずに決定したい」と締めくくっている。「筆跡のみから作品の著者を判断することはできない、と留保をつけていた」（編著 pp.79-80）というような消極的姿勢ではない。

最後に、大村氏が「研究史を全体としてみたとき、もっとも影響力があるのはマイヤーの仮説であろう」（編著 p.80）「最近の傾向 [新MEGA先行版、新MEGA I/5編集者の場合] として、この問題を最初に取り上げたマイヤー仮説の復位が進んでいる」（同 p.81）と言う、そのG.マイヤー¹⁵⁾を検討しよう。論旨を正確に捉えるため、ここでも敢えて長く引用する。

「マルクスとエンゲルスが彼らの歴史観を初めて体系立てて創出していた時代ほど、彼らの精神的な財産の持ち分を相互に区別すること（die Sonderung ihres geistigen Besitzes）が困難な時期は、彼らの生涯で恐らく他に無いであろう。鼠どもにかじられずに残された草稿の圧倒的大半（それが最終的な清書稿であるのかもまた疑わしいのであるが、）は、エンゲルスによって書かれており、マルクスによってはただ、諸挿入・改善が行われているだけである。・・・しかしながら我々の場合、筆跡から著者を結論することはできない。マルクスの字は読みにくく、エンゲルスの字は読み易かったので、通例はきっとエンゲルスが、単に最終的な印刷用原稿の作成のみならず、彼らが恐らく事前に議論を尽くしたコンテキストを最初にペーパーにする場合にも筆を執ったに違いない。両者のうちヨリ思い切りの良い人、ヨリ手早い人、ヨリ仕上げの早い人としてエンゲルスは、比較的容易な諸節については恐らくしばしば単独でも仕上げたであろう。我々が彼に関して良く知っているように、彼は、比較的大きな諸論文や諸冊子全体（それらを彼は、後になって棄却したり、あるいはそれらの出版社を見つけられなかったりしたが、その草稿は一度も破棄しなかった）を、信じ難いほど短時間で書き上げた。かくしてもし我々が、このもっとも冒険的な意味で共同した著作におけるマルクスとエンゲルス各々の持ち分を確定したいと思うならば、残された道は唯一つ、彼らの根本的特性および彼らの人間形成過程に関して何が明らかになったか、それを我々がありありと思ひ浮かべることである（So bleibt uns, wollen wir den Anteil eines jeden der Freunde an dieser im verwegensten Sinne kollektiven Arbeit feststellen, nur übrig, uns zu vergegenwärtigen, was wir über ihre Wesenseigenschaften und ihren Bildungsgang uns klar gemacht haben.）。エンゲルスが繰り返し証言しているところによると、彼が1845年春にブリュッセルでマルクスと合流したとき、彼らの歴史観のために一般的な定式化を見出し彼に完成した形で提示したのは、マルクスであった、ということである。」（ibd., S.241.）

マイヤーもまた、『ドイツ・イデオロギー』における二人の持ち分確定の最終的な決め手になるのは、マルクスとエンゲルスそれぞれの理論的、思想的独自性を我々が具体的に認識することにあると考えていたことが分かる。そしてエンゲルスの証言の通り、二人の共同の歴史観を根本的に仕上げたのは、マルクスの方であったと捉えている。

これに対する大村氏の批判：マイヤーが想定しているように、「基底稿」¹⁶⁾の執筆過程でマルクスの介入すなわちマルクスの口述がない、すなわちエンゲルスが、マルクスと同意した（従ってエンゲルスの考えでもある）「前もって十分討議されたある脈絡」や「マルクスと共同して起案した諸節」を、自発的、主体的に基底稿として紙上に写し取った（筆記した）なら、そこでの即時異文が、エンゲルス単独稿の約7倍になり、その出現頻度が、マルクス単独稿（『経済学＝哲学手稿』等）の2倍弱となり、また „das“ と „daß“ との混同というドイツ人ならまず間違えない同音異義語の混同が一定数存在、さらにマルクス単独稿には確認するのは容易だが、エンゲルス単独稿には稀な名詞変更に伴う冠詞の変更、一旦書いた文字を削除し直ちに修飾語を付して復活させる事例が、エンゲルス単独稿の10倍～20倍超にはならなかっただろう。「マイヤー仮説は、従ってまたそれと同軸にある旧MEGA I/5、新MEGA 試行版、新MEGA 先行版そして新MEGA I/5もまた、リャザーノフや廣松 [渉]、あるいはベンディエンの仮説と同じ問題に直面し、解決不能となるのである」（編著 p.105.）。

要するに、すべてこれまでの『ドイツ・イデオロギー』研究史は、草稿における「即時異文」の出現頻度が筆記者エンゲルスの単独稿と比較して異常に多い事実、マルクスの「書き癖」がエンゲルス筆跡なのに頻繁に現れる等の事実をどう説明するか？という問題に直面して、「解決不能」に陥る。これを解決できるのは、唯一「マルクス口述・エンゲルス筆記」という大村説を認めることだけである、と結論付けられている訳である。

ところが、大村氏が、自己の仮説を裏付けるものとして掲げた多くの事例が氏の正しさを証明する事例ではないことは、本稿 I で詳論した通りである。これまでの研究史批判も、すべて「即時異文」等の問題に還元して批判するのではなく、中でもとりわけリャザーノフ（1926）については、氏の説とのかかわりが深いものなので、ヨリ精確に・深く対論すべきであったろう。

III

以上、大村 泉説を批判的に論評してきたが、それでは氏の仮説の提起が持つ学問的斬新性・画期性はどこにあるのだろうか？

私見では、マルクスとエンゲルスによる『ドイツ・イデオロギー』草稿の共同作成過程を、初めて現在進行形の過程として再現したことで、これは非常に独創的・重要な業績だと考えられる。そしてそれにも拘らずそれが、実り少ない結果に留まっているのは、「マルクスの書き癖」という、発想は面白いけれども一面的に固化すると却って学問上の障碍になるアイデアに、氏がひたすら依りかかっているためと思われる。

「マイヤー以来、新MEGA 先行版、新MEGA I/5の編集者を含めて、共同執筆説を採る論者は、いずれも、草稿執筆前にマルクス/エンゲルスの真摯な討論があったこと、そしてこの討論を取り纏めた、つまり文章化したのがエンゲルスであったことに疑いを挟んでいない……。だがこの文章化のイニシアチブをとったのがマルクスではなく、エンゲルスであれば、草稿同章で初めて定式化された唯物史観の諸テーゼは、マルクスよりはエンゲルスの頭脳に由来すると言って良く、また

そのように言わざるを得ない。」(編著 p.81. 下線は黒滝。文章化のイニシアチブをエンゲルスがとったなら、何故唯物史観の諸テーゼがマルクスではなくエンゲルスの頭脳に由来するということになるのか？ 二人で議論を尽くしたら、どちらが唯物史観をより根本から深く捉えているかは双方に明瞭になる。そのマルクスの、自分より深い捉え方をエンゲルスが自分の頭で理解して初めて、それを文章化できたのであろう。エンゲルスが、唯物論的歴史観を創出したのはマルクスであって、自分ではない。自分はただ第2バイオリンを弾いてきただけであると生涯表明し続けたのは、当然である)。

「一般に、草稿の著者同定では、基底稿の筆跡が最も重視されてきた。基底稿のほぼ100%がエンゲルスなら、第1章『フォイエルバッハ』の真の著者、従ってまた唯物史観の第1発見者はエンゲルスと言うべきである。ところが他方、エンゲルス自身は、・・・唯物史観の第1発見者はマルクスであることを繰り返し明言している(新MEGA I/31, S.119f.)。これは矛盾である。/ 矛盾というのは、草稿同章の筆跡から著者がエンゲルスであるとすれば、エンゲルスが、**自主的かつ自発的に彼の意思で(彼の頭で)**、草稿同章に残る唯物史観の諸定式を書いたことになる。しかし後年、これを否定する証言をしているからである。この**矛盾を解消する唯一無二の方法は、草稿同章がマルクス口述・エンゲルス筆記によって成立したことを論証すること**、すなわち、草稿同章に見られる唯物史観の諸定式は、マルクスが整理したものであって、エンゲルスではないことを論証することである」(編著 p.77. 下線、太字は黒滝。これではエンゲルスは、自主的でも自発的でもなく、自分の意思も無く、自分の頭を使うことも無く、受動的にマルクスの口述するところをただひたすら筆記したことになってしまう。これが唯一無二の解決だというのは、荒唐無稽の話になろう)。

こうした脇道に逸れないためには、マルクスとエンゲルスが同じ時間・同じ場において議論を続けながら共同で文章を創っていく草稿共同作成過程を、大村氏の見出した現在進行形に則って具体的に描いていかねばならないであろう。「即時異文」が異常に多いという問題を「書き癖」・「書き誤り」に解消するのではなく、そもそも初めにマルクスとエンゲルスは何を書こうとしたのか、そしてそれを何故どのように修正したのか(単なる誤りの訂正ではない)、それを草稿に即して詳細に分析すべきであろう。そうすればその中に、理論的・歴史的に重要な諸問題が潜んでいることが見出されるだろう。マイヤー、リャザーノフ、新MEGA編集者たち、それぞれ表現は異なるがマルクスとエンゲルスの理論的相違の問題を、草稿の著者はどちらか？という「持ち分問題」と不可分の問題として考察しているのは、この点に関わっているように思われる。大村氏の、今後の新たな展開を期待したい。

【追記】

本稿脱稿後に、橋本直樹氏による大村編著に対する書評の存在(季刊 経済理論 第56巻第3号、2019年10月、pp.079-082)を知らされた。氏の大村編著評価は、拙稿とは正反対である。両者を十分に対比・検討していただければ幸いである。

注

- 1) 渋谷 正 編・訳『草稿完全復元版 ドイツ・イデオロギー』[本巻・邦訳篇] (以下「渋谷①」と略記) 新日本出版社 1998年6月、pp.80-81; 同[別巻・注記解題篇] (以下「渋谷②」と略記) 新日本出版社 1998年6月、pp.191-193.
- 2) 『ドイツ・イデオロギー』と唯物史観—オンライン版公開国際シンポジウム— [第I部8月23日(金)14:00~17:40; 第II部8月24日(土)9:00~16:10 於:東北大学大学院情報科学研究科・2階中講義室]
- 3) Karl Marx/Friedrich Engels GESAMTAUSGABE (MEGA), I/5, bearbeitet von Ulrich Pagel, Gerald Hubmann und Christine Weckwerth, Berlin/Boston 2017, S. 723.
- 4) a.a.O., S.751.;「解題 [新MEGA 第I部門第5巻]」玉岡 敦/窪 俊一/大村 泉/渡辺憲正 訳、マルクス・エンゲルス研究者の会『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第60・61合併号、八朔社 2019年6月、pp.96-97, pp.137-138.
- 5) a.a.O., S.72, S.914. 抹消はエンゲルス; 編著 p.98.; レジメ p.4.
- 6) a.a.O., S.108, S.935. 抹消と挿入 (|::|) はエンゲルス。編著、レジメは同上。
- 7) a.a.O., S.119, S.940, S.947. 抹消と挿入はエンゲルス。編著、レジメは同上。なおこの箇所については、渋谷① pp.174-176; 渋谷② p.171 参照。

渋谷氏は後に、これはエンゲルスによるマルクス口述の聞き誤りと考えるほか無いと判断し、その理由を以下のように詳論している：草稿の筆記者のエンゲルスは、一旦“das”と書いた直後に、この“das”の末尾の“s”に“ß”を書き重ねて（即時異文）定冠詞の“das”を接続詞の“daß”に変えたのである……。<書き重ね>によるこの変更の理由は、die Thatsache aus のあとに記されるべき単語は、ドイツ語の文法と文脈から見て、関係代名詞の“das”でも定冠詞の“das”でもありえず、“die Thatsache”（事実）という名詞の付加語を導く接続詞の“daß”でなければならないということにある。なぜならば、die Thatsache aus のあとの単語が関係代名詞であれば、先行詞となるべき die Thatsache が女性名詞であるのだから、関係代名詞は das ではなく die でなければならない、他方、定冠詞の das の場合には、定冠詞の“das”の直後に再び定冠詞の“das”が書かれることはありえないからである。/ドイツ語の文章を自ら起草するドイツ人が、上述のように、最初に定冠詞の“das”だけを書いて、直ちにそれを同音異義語の“daß”に書き換えて、その前の名詞である“die Thatsache”の内容を説明する副文章を書き続けるなどというのは、およそ考えられないことである。この即時異文は、大村の言うように、「同一の著者、それもドイツ人である同一の著者に由来すると通常考えることができない即時異文」というほかなく、口述筆記によるエンゲルスの聞き誤りと考えるのが、もっとも自然なように思われる（編著 pp.161-162. /は段落改め。太字は原文）。

以上の渋谷説は、文法の説明それ自体は正しいが、問題は、ドイツ人であるエンゲルスが通常有り得ないミスや聞き誤りならば簡単に犯してもそれは自然だという氏の判断にあらう。出来上がった文章を前提にして文法問題を論じるのではなく、そもそもそういう聞き誤りはありうるのか？と、疑問を持ってしかるべきではなかろうか？

- 8) a.a.O., S.82, S.920f.; 編著 p.98, pp.110-114.; 渋谷② pp.123-124.
- 9) a.a.O., S.68f., S.913; 編著 p.100.
- 10) 渋谷氏は「アドラツキー版 [旧MEGA版] は、ein Produkt der Arbeit の前に die Arbeit が抹消されていると報告するが、Arbeit が抹消されている事実はない」と述べている（渋谷② p.108）。Karl Marx/Friedrich Engels Histo-

risch-kritische Gesamtausgabe (旧 MEGA), I. Abteilung, Bd. 5, Im Auftrag des Marx-Engels-Lenin-Instituts Moskau, hrsg. von V. Adoratskij, Berlin 1932, S.579. [私は復刻版を利用: Verlag Detlev Auvermann KG, Glashütten im Taunus 1970/Oceana Publications, Dobbs Ferry/New York 1970]; 新 MEGA, a.a.O., S.68 の M40 写真版、これを見ると事実関係は、氏の述べてとおりである。しかし旧 MEGA の誤りは、マルクス、エンゲルスが当初何を書こうとしたかについての判断を織り込んだところから恐らくは生じたように思われる。

- 11) 本文の表記は、新 MEGA ではなく渋谷氏に拠った: 「存在する (existirt)」は、「見いだす (findet)」を抹消して、その上の行間に書き込まれている (渋谷② p.109.)。これを、新 MEGA, S.914 に拠って本文と同じ様式で表すと、Im ersten Falle ~~findet die kleine Industrie~~ existirt die kleine Industrie, となる。新 MEGA 収録の写真版 (a.a.O., S.68) で確認すると、この場合には渋谷氏の方が正しい。
- 12) Karl Marx, Friedrich Engels, Joseph Weydemeyer, DIE DEUTSCHE IDEOLOGIE, bearbeitet von Inge Taubert und Hans Pelger, unter Mitwirkung von Margret Dietzen, Gerald Hubmann und Claudia Reichel, in: MARX-ENGELS-JAHREBUCH 2003, hrsg. von der Internationalen Marx-Engels-Stiftung Amsterdam, Akademie Verlag GmbH, Berlin 2004.
- 13) この文章は大変訳しにくいので、念のため原文を記す: Wer ist der Verfasser dieser Rezension? Die Autorschaft an die überlieferte Niederschrift von Engels' oder von Marx' Hand zu binden, d.h. Engels einerseits als Hauptautor zu bestimmen oder andererseits ihn nur die Funktion des Schreibers zuzuweisen, ist nicht zulässig. Es gibt immer noch kein überliefertes Zeugnis, welche Bedeutung der mündliche Diskurs für die Niederschrift hatte. (ebd., S.168)
- 14) MARX-ENGELS-ARCHIV, Zeitschrift des Marx-Engels-Instituts in Moskau, hrsg. von D. Rjazanov, I. Band, Frankfurt/Main o.J. [1926], S.217. 私は復刻版を利用: Verlag Sauer & Auvermann KG, Frankfurt a. M. 1969. 訳文中の太字は、原文隔字体。下線は黒滝。
- 15) Gustav Mayer: Friedrich Engels. Eine Biographie, 1. Band, Friedrich Engels in seiner Frühzeit 1820 bis 1851, Berlin 1920.
- 16) 「基底稿」というのは大村氏の独自概念術語。新 MEGA テキスト部に収録されているテキストから、「後刻異文」の諸要素すなわちテキストの推敲過程で生まれる削除、置換、挿入 (追加)、展開順序変更などによって生じた変更箇所を変更前に戻したテキストのこと (編著 p.114)、要するに草稿を最初に書いた段階で実際に書かれたテキストを再現したものである。

“The German Ideology” manuscript a product of “Marx’ dictation-Engels’ notes” ?

— Examining the hypothesis suggested by Izumi Omura. —

Masaaki Kurotaki

Since 2017 Izumi Omura has put forward a fresh and interesting hypothesis concerning the authorship of the “Feuerbach” Chapter in *The German Ideology* : though Engels wrote almost all texts of the manuscript of the “Feuerbach” Chapter, Marx was the real author, who dictated those texts to Engels. As the proof of it Omura found abnormally much immediate corrections in texts, that Engels was never used to make, but that Marx always made. There may be, further, a lot of mishearing-errors etc. accompanied by a dictation. So are the Omura’s assertions.

After careful examinations of them I have come to the conclusion that Omura doesn’t succeed in establishing his own hypothesis. But his original epoch-making result is that he has first reproduced the collaborating process of Marx and Engels in creating “*The German Ideology*” manuscript 1845/46 as the progressive form.